

人文学部プロジェクト活動

人文学部は、以下のプロジェクトに戦略的経費（研究プロジェクト助成）を配分しています（右は代表者名）。

刊行物助成

英語と英米文学	池園 宏
独仏文学	Michel de Boissieu
山口地域社会研究	速水 聖子
山口大学哲学研究会	ジュマリ・アラム

『英語と英米文学』

『英語と英米文学』は、山口大学人文学部・教育学部・経済学部・国際総合科学部・教育支援センターに所属する教員グループが、年1回刊行している学術研究誌である。メンバーは現在12名で、このうち人文学部教員は欧米言語文学コース所属の6名（上田由紀子、藤原慶樹、大庭明莉、池園宏、外山健二、カテリーナ・オリハ）である。掲載内容は各メンバーの日頃の研究成果を反映した論文等で、その領域は英語学・英米文学・英語教育・英語圏文化など多岐にわたっている。1965年に創刊された本誌は非常に長い歴史を持ち、今年度で第60号の刊行を迎えた。最新号の掲載内容は以下の通りである。

1. Parametric Variation in Feature Inheritance and Its Consequences for Clause Structure

(Yukiko UEDA : 人文学部)

2. An Analysis of Metadiscourse Markers in Tourists' Comments: Hedges and Boosters Used in Tourists' Comments on Popular Travel Destinations in Japan

(Kayo FUJIMURA-WILSON : 経済学部)

3. Music and Professionalism in *The Unconsoled*

(Hiroshi IKEZONO : 人文学部)

4. What is the Impact of Teachers' Mindsets on Learning Outcomes?

(Jihyun PARK, Ariel K. SORENSEN : 国際総合科学部)

なお、人文学部から配分された戦略的経費（研究プロジェクト助成）は、今年度の刊行・発送に要する費用の一部として有効に活用されている。また、本誌の電子版は山口大学学術機関リポジトリYUNOCAにより学内外に広く公表されている。これらの支援を受け、『英語と英米文学』は今後も継続的に各研究者の活動成果の公表に寄与していく予定である。

(池園 宏)

『独仏文学』第47号

山口大学独仏文学研究会が刊行している『独仏文学』は、ドイツ語文化圏およびフランス語文化圏の文学や言語学をはじめ、文化、歴史、社会、美術など幅広い分野の研究論文を掲載する学術雑誌である。当雑誌では、投稿論文の質を確保するため、2018年の総会の決定に基づき査読制度が導入されている。今年度編集委員会は学外の研究者3名に審査を依頼した。第47号に掲載されるのは次の4本である。

1. 下寄正利：「語幹形態とアプラウトの間に見られる関係の特殊事例」
2. 武本雅嗣：「否定比較構文について」
3. 稲垣健太郎：ある文献学の「殉教者」の肖像：ヨーハン・ヤーコプ・ライスケ『自伝』の翻訳と研究（1）
4. Michel de BOISSIEU： *Le Passager du Polarlys et Le Point zéro*

(Michel de Boissieu)

「山口地域社会研究」プロジェクト報告

「山口地域社会研究」プロジェクトは山口地域社会学会の研究活動を中心としており、現在に至るまで、例年1～2回の研究例会の開催、ならびに年1回の学会誌『やまぐち地域社会研究』の発行を継続して行っている。研究例会は、会員によるそれぞれの研究発表を毎回2～3本ずつ報告する形で行われ、活発な意見交換がなされている。人文学部の現教員は速水聖子・吉武理大（現代社会学）、高橋征仁・桑畑洋一郎（社会心理学）、谷部真吾・小林宏至・山口睦（民俗学・文化人類学）の計7名で、社会学コースの教員全員が学会員である。さらに、経済学部や教育・学生支援機構、時間学研究所所属の教員会員のほか、大学院人文科学研究科（修士課程）と大学院東アジア研究科（博士課程）の学

生会員もおり、例会は教員・大学院生の研究成果発表として大きな役割を担っている。

2025年は、第57回研究例会を7/12（土）に人文学部小講義室にて開催し、以下に挙げる報告がなされた。

「外国人児童における日本語の難易度と算数解答力の関係—アンケート調査による—考察」 梶村知美（山口県立大学）、「ひとり親世帯におけるメンタルヘルスの格差」 吉武理大（山口大学）、「企業活動と贈答文化—カタログギフトを事例として—」 山口睦（山口大学）、「地方都市において補助犬と暮らす」 桑畑洋一郎（山口大学）、の4本である。

今回の例会においてもフロアからの発言をふまえ、質疑応答が活発に行われ、参加者にとって有意義な研究会となったことが期待される。今年度の研究例会の成果を踏まえて、年度末に学術雑誌『やまぐち地域社会研究』（第23号）を刊行する予定であり、現在、編集作業を準備しているところである。

(速水聖子)

『山口大学哲学研究』

『山口大学哲学研究』は、山口大学哲学研究会が毎年刊行する会誌である。山口大学哲学研究会は、山口大学に所属する哲学・思想系の教員を中心とする組織で、会誌の刊行のほか、合評会、研究発表会などの活動を行っている。現在、正会員（学内の常勤職員である会員）は12名で、そのうち人文学部の教員は、ジュマリ・アラム、柏木寧子、栗原剛、藤川哲、村上龍、横田蔵人、脇條靖弘の7名である。他部局の正会員は、田中智輝（教育学部）、石井雅巳（教育学部）、山本勝也（経済学部）、小川仁志（国際総合科学部）、小山虎（時間学研究所）の5名である。また、名誉会員（過去に山口大学に所属したことのある学外の会員）は22名で、そのうち人文学部の元教員は、上野修、遠藤

徹、加藤和哉、木村武史、周藤多紀、武宮諦、田中均、外山（松本）紀久子、林文孝、古莊真敬、頼住（佐藤）光子の11名である。2025年度は、ジュマリ・アラム（人文学部）と藤川哲（人文学部）が運営委員を担当した。

本年度も例年通り会誌『山口大学哲学研究』の刊行を続けた。2025年3月（昨年度）刊行の第32巻は、年度をまたいだ2025年4月、会員諸氏・諸機関宛てに送付した。掲載論文等は、「相良亨『伊藤仁斎』における古義学の基層」（栗原剛）、「三輪山神婚譚をてがかりとした古代日本の世界観の考察：比較思想的視座から」（頼住光子）、「『今昔物語集』天竺部における釈迦仏の出現」（柏木寧子）、「偶像転移：宗教精神分析学の新たな視座に向けて」（ジュマリ アラム）、〈研究ノート〉「尾形一彦『北海道倶知安日記・香月泰男』索引」（藤川哲）の五本である。刊行に際し、人文学部より支給された「刊行物助成経費」を、印刷・製本費用の一部に充てさせていただいた。また本年度は、第32巻に掲載された論文の研究の延長線として、9月19日に「山口大学哲学研究会」主催の研究発表会を開催しました（発表した会員は村上龍とジュマリ・アラムの2名）。

なお『山口大学哲学研究』第33巻は2026年3月刊行の見込みであり、村上龍、柏木寧子、脇條靖弘、ジュマリ・アラム、藤川哲の各氏による研究論文等の掲載が予定されている。

（ジュマリ・アラム）